

共生から共死へ

前国際日本文化研究センター所長
やまおりてつお
山折哲雄

私はこれまで二度の手術を受けて、今日の生命を享受することができた。近代医療のおかげである。この大切な生命を全うするためには、このさきゆっくりやってくる老病死の瞬間とじっくりとつき合わなければならないと思っている。あらたな生老病死を考えなければ生らない時代がやってきたのである。生を全うするとともに、死を静に受容するときに、もう間近に迫っている。医療と宗教を腰を下ろして考える時が熟しているのである。